

# 平和の語り部 長崎被爆体験 家族の証言

(令和3年2月20日 午後2時～午後2時45分 Zoom開催)

講師：大越 富子さん

## 【はじめに】

長崎市の人口24万人のうち、その年の12月末までに、およそ7万4千人が死亡、7万5千人が重軽傷を負いました。そのうえ二次火災が起こり、延焼をさらに拡げて夜中まで燃え続けました。

焼けてしまった面積は、市街地の三分の一にあたる6.7平方kmです。

原子爆弾が他の爆弾と違う点は、爆発の時に大量の放射線が出るという点です。原子爆弾の放射線は人の身体に入り込み、細胞を破壊するので、身体の器官の働きが悪くなって病気になります。原子爆弾によって直接けがややけどをしていなくても、ある日体調が悪くなって出血したり、皮膚に斑点が出たり、身体がだるく、動けなくなり死亡します。それは放射線を受けた影響で亡くなるのです。

また、燃え上がって灰になったものは、地上に落ちた『死の灰』。これが混じって雨となった『黒い雨』などには、爆発せずに残った放射性物質が含まれていました。

## 【家族について】

これから家族の話を始めます。

原子爆弾が投下される前、私の家族は父・母・兄が3人の5人でした。私は終戦2年半後に生まれたので、この時はいません。

長崎市伊良林町に住んでいました。ここは長崎駅から1kmぐらい離れている、『長崎くんち』で知られている諏訪神社の近くです。

1945年、昭和20年の春に父に召集令状が来ました。召集令状とは、一般の人に軍隊に入るようにという国からの命令文書です。

父が入隊したので、母・兄たちは、父の実家の時津村に疎開しました。時津村は爆心地より北西6kmの、長崎市の隣村です。製鋼所や造船所のある市内よりは安全で、畑が少しあり、祖父母もいるという理由からでした。

父は兵隊に行く前は、国有鉄道、現在のJR九州旅客鉄道の長崎駅で貨物関係の仕事をしていました。しかし44歳で兵隊に召集され、佐世保の海兵団に入隊しました。兵隊にしては高齢でした。

海兵団では兵隊の食事を作っていました。

父が入隊した後生活は苦しく、特に食べ物が不足していました。

当時、国の制度で配給制度がありました。食糧や衣類など、生活に必要なものを買うためには、通帳や切符を持っていかねば買えないのです。お米を買えたとしても、お腹いっぱい食べられる量は買えません。

そこで芋や芋のつる、カボチャなどをお米のかわりに食べるのです。まだこのような食事は良い方で、『ひゅうな』という雑草なども食べていました。毒ではないものは何でも食べていたといっても言い過ぎではなかったのです。

皆さん、想像してみてください。戦争とはこのような、我慢、我慢の生活をしなければならないのです。

1945年、昭和20年8月9日は、時津村全体がお盆前の大掃除日で、各家庭では庭に畳を出し、陽に干していました。

母は被爆当時38歳でした。3人の兄たちは、14歳・5歳・2歳でした。

午前11時近くになり、太陽がだいぶ高く上がったころ、飛行機の爆音が響いてきました。そしてしばらくすると、空がピカッと青白く光り、数秒後すごい音が響き、風が吹き、木々が激しく揺れました。母はすぐ近くに爆弾が落ちたのではと思い、家族みんなで裏の竹山に逃げ込み、しばらくして様子を見に家に戻ると、庭に干していた畳が飛ばされ、ガラスは割れて散らばる、障子やふすまは吹き飛び、家の中は散乱していました。爆心地より6km離れているにもかかわらず、このような被害が出ました。

長崎方面を見ると、黒い雲が広がっていて、その雲が時津村の方にもかかってくるような感じてした。夜には空が真っ赤に染まりました。

その日のうちに、けがややけどを負った人たちが、無事だった病院や臨時の救護所になった学校に収容されました。次から次へと運び込まれ、負傷者であふれ、時津国民学校、今でいう時津小学校にも救護所が設けられました。母たち村の婦人部は役場から要請され、救護活動をするため、時津国民学校に駆り出されました。

一つの教室に30人ほどが寝かされていましたが、男女の区別もわからないほど大やけどを負い、母は「これが人間か…」と思いました。手当て用の医療品は満足になく、ただ身体に刺さったガラス片を箸で抜くくらいのことしかできませんでした。教室中異臭が漂い、その後、けがややけどの傷口に、ハエの幼虫であるうじ虫がわき、それを取るのに追われました。うめき声をしていた人の声がしなくなったので様子を見ると、亡くなっていました。その繰り返して、母は「地獄のようだった。思い出したくない」と言っていました。

原子爆弾が投下されて3日後、母は、爆心地から1km前後の「竹の久保町」に親戚がいたため、2歳の兄をおんぶし、歩いて探しに行きました。大橋あたり、爆心地より500mぐらいまでは行けましたが、橋を渡ることができませんでした。幼い子供を連れた母はそれ以上先に進むことを断念し、時津村の家へ引き返しました。そこには見るに堪えないたくさんの死体があり、またがれきりものすごいものでした。母はその場所について、それ以上のことは話せませんでした。話せなかったのではないのでしょうか。

帰宅後2人は下痢が20日間ほど続きました。さらに母は足に湿疹が出ました。その当時、履物は靴ではなく草履や下駄でした。放射能を帯びた地面を踏んだため、被爆の急性症状が何より酷かったと思われます。

一方で父は、原子爆弾が投下された後、海兵団の命令ですぐに佐世保から長崎市内に入り、遺体処理やがれきの片づけにあたり、その後8月20日ごろ、時津村の家に戻ってきました。

母は被爆後1年半あまりで私を妊娠しました。そして1948年、昭和23年2月に（私を）生みました。出産後お乳が出ず、牛乳を買うにもお金がなく、お米を水に浸して柔らかくし、すり鉢ですりつぶし、火にかけてどろどろにしてお湯を増し、それをお乳代わりに飲ませました。

私は幼いころ身体が弱く、高熱をよく出していました。小学校に入学しても高熱を出して、学校を頻繁に休んでいました。母はそんな時、「富子は赤ちゃんの時、栄養が足りんやったもんねえ」と気の毒そうに話していました。

私は白血球の数値が平均値よりも少ないです。

私が12、3歳になったある日、母は突然話を始めました。

私を流産するようにと、水風呂に入ったり重い石を持ったりしたけど生まれた。

私は大きなショックを受けました。なぜそうしたのか、聞いていません。とっさに聞けませんでした。

私はこの世に生まれていないかもしれないのです。そのことが頭のどこかにくすぶっていたのでしょう。反抗期に母から注意を受けた時、「べつに生んでくれと頼んだ覚えはない」と言ってしまいました。今でもその言葉を言ったことを非常に、非常に後悔しています。

母は被爆者の両親から五体満足の子が生まれてくるのか、また生まれてきても、食料や生活に必要なものが不足しているこの世の中で育てていけるのだろうかと様々な不安があり、思い悩んだのでしょう。

今だからこそ、当時の母の気持ちがわかります。私自身が親になり、おばあちゃんになって、子どもや孫の健やかな成長を願わずにはいられないからです。

さて、10日間あまりの撤去作業に従事した父は、直接被爆はしていなかったのですが、その時に放射能を帯びたものを触ったためでしょうか、その後下痢が続き、身体がだるい、だるいと言って近くの病院にかかっていました。戦後は海兵団から帰ってきて、元の仕事に復帰していました。しかし、便に血が混じり始めたため、1957年、昭和32年1月に、長崎大学病院に入院しました。原子爆弾が投下されてから12年後でした。

父は1か月の入院生活でしたが、末期の肝臓がんで亡くなりました。私はその時、小学校3年生でした。

父が亡くなる日、私は学校に行って授業を受けていましたが、先生から、「お父さんの容体が悪いので家に帰りなさい」と言われ、母と一緒に病院に行きました。着いた時父は昏睡状態でしたが、しばらくすると目を覚まし、お見舞いでいただいたカステラを食べなさい、というような素振りをしました。

その後、苦しかったのでしょうか、もがいて、暖房のために入れていた湯たんぽを布団から落してしまい、また昏睡状態になり、亡くなってしまいました。父は会いに行くたびに、入院する前よりも痩せていきました。食事も摂れない状態で、検査、検査の毎日だったようです。私は、入院して治療している父が、なぜこんなに悪くなっていくのだろうと思いました。原子爆弾のせいと思ったことはありませんでした。

父からは、原子爆弾に関係した話は聞いたことはありませんでした。私も幼かったし、父自身もつらい体験を思い出したくはなかったのでしょうか。

父が亡くなってから、大学病院から、解剖をさせて欲しいと言われました。解剖をさせてくれるのなら、病院の入院費や治療費を払わなくてよいと言われました。父の妹たちは解剖に反対でしたが、母は応じました。今考えると、母は医療の研究に役立つのなら、それに生活が苦しかったので、病院の入院費や治療費を払わなくてよいのなら、と苦渋の決断をしたのだと思います。

一方で、原子爆弾に関する研究材料にされていたのでは、との思いにもなります。これは私の推測です。

父が亡くなった後、母は肝臓・甲状腺を患い、入退院を繰り返していました。

そんな時、被爆者健康手帳のことを知りました。しかし、被爆者健康手帳を交付してもらうには簡単にはいきませんでした。手帳申請をするためには、親戚以外、2名の被爆者の承認が必要でした。証明してほしい人はすでに亡くなっていたり、住所が変わってしまって、探すのにたいへんでした。

やっと54歳の時に手続きが済み、手帳を交付してもらえようになり、医療費の援助を受けることができました。それでも父が亡くなってから、高校1年の兄・中学1年の兄・小学3年の私たちを抱えた暮らしは苦しいものでした。上の兄は学校を辞めて働く、と言いましたが、母は、これからの社会では、高校を卒業してないと働く場が限られる、と言って止めました。

兄は、学校が休みになると、アルバイトをしながら卒業しました。

下の兄は、昼間は働き、夜間高校に行きました。

私も上の兄からの援助と奨学金を受け、夏休みにアルバイトをしながら卒業しました。高校まで行かせて

もらったことにとっても感謝していますが、父がいてくれたら私たちの生活は違っていたのではないか、と思います。

母は92歳で亡くなりましたが、50年あまり病気を抱え、入退院を繰り返し、不安な日々を過ごしていたに違いないと思います。

私の思いをお話しします。

私自身が被爆二世を意識し始めたのは20年ぐらい前からでしょうか。

長女が腎臓病、その後母と同じ甲状腺の病気になり手術をしました。これからの娘の人生、まだまだ健康で楽しく過ごしてほしい。親として、代われるものなら代わりたと思いました。

娘は今でも治療を続けています。現時点で政府は、被爆二世・三世に影響はないと言いますが、私の中では原子爆弾の影響が絶対はない、とは言い切れないのです。

私は仕事を退職し、少し時間的な余裕ができ、これから何かをしてみたいと思いました。その頃、上の兄は被爆者としていろいろな平和活動をしていました。兄の活動している姿を見て、私にも何か出来ることがあれば手伝いたいと思い、平和活動に参加してみようと思いました。

現在は「長崎被爆協・被爆二世の会・長崎」に入会しています。核兵器をなくすための活動や、語り部などをしています。

現在世界には1万3410発の核兵器があります。数は減っていますが、威力は大きくなっています。

そして戦争をしている国があります。国と国との戦争ですが、犠牲になるのは私たち一般人なのです。

絶対にそうなるはいけません。争いからは何も良いことは生まれません。

今、被爆者の平均年齢は83歳を超えています。だんだんと生の声で体験を聞くことが難しくなってきました。

そんな中、2017年7月7日に核兵器禁止条約が採択されました。そして昨年10月25日に3か国（で始まった参加国）が50か国になり、今年の1月22日に条約の発効となりました。

しかし、世界で唯一の被爆国としての日本は賛成をしていません。とくに世界的に大きな力を持っている国が賛成をしていません。

しかし、日本の高校生は、高校生平和大使・高校生1万人署名活動に参加し、毎年ジュネーブにある国連に署名を届けています。しかし、昨年はコロナウイルスのために行けませんでした。これまでに届けた署名は200万筆を超えています。

今後こういった若い人たちが活動の輪を拡げて、世界に平和を発信してほしいと願っています。

また、近頃は選挙の投票率が下がっています。これからの社会のあり方、皆さんの生活などいろいろなことを考えて、大事な大切な1票を投票していただけることを願っています。

平和な社会をつくることは難しいことではないと思います。

一人一人が人の心の痛みを受け止め、理解しあう社会であれば、戦争のない世界ができると確信します。

どうぞ皆さん、今の気持ちを持って前に進んでください。

話しの中で、「配給制度」「被爆者健康手帳」「核兵器禁止条約」など聞きなれない言葉が出てきましたが、調べていただいたらありがたいです。

私も講話や平和活動など、あと何年できるかわかりませんが、『微力だけど無力じゃない』を信じてお話をさせていただこうと思っています。

## 【学生の皆様に伝えたいこと】

私は、もう戦争は絶対にしてはいけないっていうことを、とにかく伝えたいですね。核兵器は地球上から皆無にしなければならない。なぜなら、その時代の人間だけでなく、後世まで影響があるということですね。あとは人の心の痛みが受け止められれば争いが起きないということ。毎日の生活の中で、そういう心を持って人に成長してほしい、っていうことも訴えたいっていうことです。

あと、そのことを、この講話を聞いて、子どもさんたちがどんなふうな感じで受け止めてくれたかな、っていうのは、小学生であれば『食べ物のこと』が一番です。

「そんなに食べ物はなかったんですか？」とか「なんで芋やかぼちゃを食べるんですか？」とか「どんなにして食べるんですか？」とか、そういうふうなですね。だって今は芋とかおいしいじゃないですか。っていう子もいるんですけど、昔の芋って、今みたいな品種改良もしていないし、とにかくお腹がもう満たされればそれでいいっていうような感じの食べ物しかなかったんですよ。

そういう話をすると、「自分も好き嫌いはあるけれども、何でも食べられるように努力します」っていうお子さんがいたり、そのことで「毎日の食事を作ってくれるお父さん・お母さんに感謝します」というような子どもさんですね。「今の食事が当たり前だと思ってたけど、毒が無かったら何でも食べた、食べていたっていう、想像もできない食事だったんだな。もっと感謝して食べなくちゃいけないですよ」みたいな話ですね。

「戦争は、想像していたよりもひどく悲しいものっていうのを実際に講話で聞いてわかりました」とか「原子爆弾の爆発時の放射線、爆風の威力、熱線はすごいなあと改めてわかりました」とか、そういう風な感じで、「毎日の生活が、この平和な毎日の生活がいかに大事か、っていうことが、改めて、講話を聞いた後で思える」っていうことですね。

あと私がその『微力だけど無力じゃない』っていう言葉が心に残りました」とかですね、あと「自分も平和活動をしてみたい」とか。そういう、その気持ち。

「国と国、人と人がどんなに苦しくても、助け合いの気持ちがあふれていけば、世界は平和になっていきますよね」そういうふうな感想の、あとでお手紙が来るんですよ。学校でたぶん、書いてください、ということで書いて送ってきてくださるんですけども、そういうふうなことが色々書いてありました。

(以上)

